

| | |
|------------------|---|
| Title | 地金論争に関する一考察：リカドオと地金報告 |
| Sub Title | Some remarks on the bullion controversy : Ricardo and the bullion report |
| Author | 中西, 充子 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1961 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.10 (1961. 10) ,p.862(20)- 883(41) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19611001-0020 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611001-0020 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地金論争に関する一考察

—リカアドオと地金報告—

中西 充子

(一)

「一七九七年から一八二二年まで続いたイングランド銀行による正貨支払の停止、一八一〇年の地金委員会の報告、それほど重要でないが、一八〇四年のアイルランド為替委員会の報告は、イギリスにおいて貨幣および銀行論に関する非常に多くの論争的文献をもたらした」といわれるように、一七九七年の銀行制限条例 (Bank Restriction Act) を契機として生じた紙幣の減価、それにとまらぬ為替相場下落、物価および地金の騰貴は、当時のイギリス国民の関心を通貨問題にむけさせ、不換紙幣減価の原因をめぐって激しい論争が戦わされることとなり、ここにイギリスは、いわゆる地金論争 (Bullion Controversy) の渦の中にまきこまれたのであった。

正貨支払停止期の考察は、通貨価値下落のていどにしたがって、およそ二期にわけてなされる⁽²⁾。

正貨支払停止期の初期においては、政府およびイングランド銀行の慎重な政策によって、兌換停止による影響はきわめて軽微であった。地金の価格は、二年間その造幣価格三ポンド一七シリング一〇ペンス半を維持した。

しかし一七九九年に騰貴しはじめ、一八一〇年には、四ポンド五シリングであったと記されている⁽³⁾。一八〇八年まで、この値はほぼ持続されたが、この間における地金騰貴の現象は、ポイド⁽⁴⁾、キング⁽⁵⁾、ソートン⁽⁶⁾、ホイートリイ⁽⁷⁾などによる一連の論争的文献を生み出した。

一八〇九年に至って地金の価格は、ふたたび急速に上昇した。クラップムは、この年をもって地金をプレミアムづきで売る誘惑が生じ、金の市場価格と造幣価格の間の差がはなはだしくなったとして、これをナポレオン戦争の期間の通貨史を二局面に分つ事実としているが、すなわちこの期間に地金の市場価格は、四ポンド一〇シリングにまで達したのである⁽⁸⁾。

こうした状態に刺激されてリカアドオは、モーニング・クロニクル (Morning Chronicle) に「金の価格」 (Price of Gold) を論じた三つの書簡⁽¹⁰⁾を寄稿し、ついでよく年には、「地金の高価、銀行券減価の証拠」 (High Price of Bullion: a proof of the Depreciation of Bank Notes) を出版して、経済学者としての第一歩をふみ出した。

これらの論文を通じてかれは、当時の地金の高価という現象をうれうべき事実と認め、すみやかなる救済策を講じるように世にうたったのであった⁽¹²⁾。

一方下院議員ホーナー (Francis Horner) は、一八一〇年二月一日、「現在の地金の高価の原因と、その紙幣の価値におよぼす結果について調査する」特別委員会を設置するよう政府に提案し、かくして地金委員会は、「地金の高価の原因について調査し、そして通貨およびイギリスと外国との間の為替状態を考察する」ことを委託され、六月八日には、はやくも地金報告書 (Bullion Report) が議会に提出された。

この地金報告とリカアドオの通貨問題に関するいくつかの著作の出現は、人びとの注意をうながし、これに対しておびただしい評論があらわれた。それは「十九世紀における大貨幣論争の最初のもの」であり、かつおそらく最も有名な議論をひきおこした⁽¹⁶⁾のであって、地金論者 (Bullionist) と反地金論者 (Anti-Bullionist) との論争は、その後もあとをひいて対

立を続けることになった。

この論争によって古典学派の貨幣理論は、一やく発展をとげたといえよう。

その後今世紀に入って、地金論争についてのまとまった広はんな研究が、ホランダー⁽¹⁷⁾、キャナン⁽¹⁸⁾、ホートレー⁽¹⁹⁾、シルヴァーリング⁽²⁰⁾、エンジェル⁽²¹⁾、フィヴィーリヤー⁽²²⁾、ヴァイナー⁽²³⁾など、その他多くの学者たちによって手がけられ、フェッターが、「今日経済学者たちは、地金論争にふくまれた学説の論点について、そしてその歴史上有名な論争の政治的背景について、正統学派経済学の全盛期におけるよりもはるかに明白な理解をもっている。もはや地金主義貨幣理論のすべては、『リカード学派』(Ricardian)という語の下に総かこわれず、また地金報告は、『正統学派経済学』(sound economics)の象牙塔にはじまった学説としてみなされない⁽²⁴⁾」と主張するごとく、この問題をあつかった論文が数多く発表されている。本稿においては、地金論争研究の一端として、地金論争の代表者とみなされているリカードオの貨幣理論を中心として、その地金報告との関係について、二・三の問題をとりあげ検討を試みたいと思う。

- (1) L. W. Mints, A History of Banking Theory in Great Britain and the United States, Chicago, 1945, p. 42.
- (2) Cf. A. Andreadés, A History of the Bank of England, translated by C. Meredith, London, 1909, p. 204. 岡田義一郎訳「英蘭銀行史論」二七四頁参照。
- (3) Thomas Tooke, A History of Prices, and of the State of the Circulation, Vol. II, London, 1838, p. 379.
- (4) Walter Boyd, A Letter to the Rt. Hon. William Pitt, on the Influence of the Stoppage of Issues in Specie at the Bank of England; on the Prices of provisions, and other commodities, London, 1801.
- (5) Lord King, Thoughts on the Restriction of Payments in Specie at the Bank of England and Ireland, London, 1803; Thoughts on the Effects of the Bank Restriction, 2nd ed. enlarged, 1804.
- (6) Henry Thornton, An Enquiry into the Nature and Effects of Paper Credit of Great Britain London, 1802.

(17) John Wheatley, Remarks on Currency and Commerce, London, 1803.

(18) Sir John Clapham, The Bank of England, A History, Cambridge, 1958, Vol. II, p. 8.

(19) Tooke, op. cit., p. 379.

(20) Three Letters on the Price of Gold, by David Ricardo, ed. by J. H. Hollander, Baltimore, 1903.

リカードオのモーニング・クロニクル紙への最初の寄稿は、一八〇九年八月二十九日「金の価格」(Price of Gold) という標題の下に無署名であらわれた。この論文は、九月十四日「銀行券の友にして銀行理事であらざる者」(A Friend to Bank Notes, but no Bank Director) という匿名の一論者によって、鋭い攻撃を受けたのであったが、リカードオはこれに答えるため、同二〇日モーニング・クロニクル紙編集者にあつて、「R」という署名の下に、ふたたび寄稿した。これに対する「銀行券の友」——その筆者は、実はリカードオの友人ハッチェス・トラヴァ(Hutches Trower) であつた——からの第二の書簡は、十月三〇日の紙上であらわれ、リカードオは、十一月二三日第三の寄稿をもって、これに答え、かれらの間の新聞紙上の論争は、これで打ち切られた (Cf. J. H. Hollander, David Ricardo, A Centenary Estimate, Baltimore, 1910, p. 45. 山下英夫訳「リカードオ研究」五三頁参照)。

(21) この書は、一八〇九年十二月一日の序文をもって、よく年早々出版された。
(22) リカードオは、モーニング・クロニクル紙の一八〇九年八月二十九日号に寄稿した「金の価格」の冒頭において、つぎのように述べている。

「現在の市場価格は、その造幣価格以上に騰貴しており、このことは著しく公衆の注意をひきつけているように思われる。しかし、かれらは、この問題の重要性と、さらに銀行券の減価をとまなうかもしれない不幸な結果について、充分にさとっているように思われぬ。私は、いまのうちにわれわれがとってきた措置を回顧し、通貨を長くわが国に存在した健全なる状態に復帰させ、そして現在の不幸および将来の破滅をばらんでゐる現状から離脱することを熱望してゐる。」(Works and Correspondence of David Ricardo, ed. by P. Sraffa, Cambridge, 1951, Vol. III, p. 15. 以下、Works と略記する。)

(23) William Smart, Economic Annals of the Nineteenth Century, 1801—1820, London, 1910, p. 237.

(24) Ibid., p. 238.

(25) 同年八月十二日、フォリオ版として刊行され、よく日には報告の要旨が全新聞にのせられた。(Piero Sraffa, Note on the Bullion Essays, Works, Vol. III, p. 8) なお十月には、オクテイヴ判の再版が出た。

(26) Andreadés, op. cit., p. 205. 岡田訳二七五頁。

ちなみに、一八一〇年から一二年六月までにあらわれた地金論争関係の文献を、印刷された年月順に並べると、つぎのごとくである。

| | |
|---------|----|
| 一八一〇年三月 | 四 |
| 四月 | 〇 |
| 五月 | 一 |
| 六月 | 二 |
| 七月 | 〇 |
| 八月 | 一 |
| 九月 | 三 |
| 十月 | 二 |
| 十一月 | 四 |
| 十二月 | 九 |
| 一八一一年一月 | 四 |
| 二月 | 八 |
| 三月 | 一五 |
| 四月 | 一二 |
| 五月 | 九 |
| 六月 | 一 |

すなわち論争は、一八一〇年秋から一二年の初夏にかけて、もっともさかんであったと考えられる。(高垣寅次郎「イギリス地金論争文献考断片」、久保田明光教授還暦記念論文集、二七一—八頁参照。)

- (17) J. H. Hollander, The Development of the Theory of Money from Adam Smith to David Ricardo, in The Quarterly Journal of Economics, XXV, 1911, pp. 429—70.
- (18) Edwin Cannan, The Paper Pound of 1797—1821, London, 1919.
- (19) R. G. Hawtrey, Currency and Credit, London, 1st ed., 1919, 4th ed., 1950, Chap. XV.
- (20) N. S. Silberling, Financial and Monetary Policy of Great Britain during the Napoleonic Wars, in The Quarterly

Journal of Economics, XXXVIII, 1924, pp. 214—33, 397—439.

Ibid., British Prices and Business Cycles, 1779—1850, in The Review of Economic Statistics, Vol. V, Supplement 2, 1923, pp. 219—62.

- (21) J. W. Angell, The Theory of International Prices, Cambridge, 1926, pp. 40—79, 447—503.
- (22) A. E. Feavearyear, The Pound Sterling, A History of English Money, Oxford, 1931, pp. 161—215.
- (23) Jacob Viner, Studies in the Theory of International Trade, N. Y., 1937, pp. 119—217.
- (24) F. W. Fetter, The Bullion Report Re-examined, in Papers in English Monetary History, ed. by T. S. Ashton and R. S. Sayers, Oxford, 1953, p. 66.

(一)

地金論争の中心問題⁽¹⁾は、「紙幣は減価したかどうか」、そして「減価の原因はなんであったか」ということであったが、リカードをはじめ地金論者たちは、紙幣減価の原因をその過剰発行に帰せしめた⁽²⁾。

かれらが第一に明らかにしなければならなかったことは、過剰発行の存在を決定する適当な方法であった。

リカードはこれについて、まず紙幣に対する地金のプレミアムが、紙幣過剰のしるしであり、尺度であると主張した。かれの関心事は、財やサービスであらわした紙幣の減価ではなく、本位金属ではかった紙幣価値の下落であったのである⁽³⁾。

この場合にリカードは、なぜ本位金属として銀よりも金をえらんだのかということをおこらう。

かれは、金がこの国の一般的価値尺度として、もっとも適当な金属であると考えたリヴァプール卿(Lord Liverpool)にしたがって、「金が過去二世紀にわたって、わが国の主たる価値尺度であった……」⁽⁴⁾と説いたが、さらに一步を進め、複本位制の作用について詳細な説明を加え、金銀比価変動の理由からこれが無用であることを論証した。

さて紙幣過剰の証拠は、リカードオによればつぎのような推論にもとづいていた。

かれは、各国の通貨量の割合はつねに一定であり、均衡を保っているという。各国はその国の商業活動や銀行組織、貨幣の流通速度に適した割合に応じて、適当な通貨を獲得する。この均衡状態の下においては、貨幣は各国において同一価値、同一購買力を有するものとされるために、通貨の輸出入をうながす誘惑は生じえない。しかしもし一国において、通貨が増加するならば、物価は他国のそれよりも騰貴するために、商品が輸入され、代りに通貨が輸出されることになり、その結果、高物価国の貨幣は減少し、低物価国の貨幣は増加し、かくしてもとの均衡状態が回復されると見るのである。

したがってリカードオは、「金銀量の変化がもたらす唯一の影響は、金銀と交換される諸財貨を相対的に騰貴または低落せしめることである」⁽⁵⁾「諸財貨の価格が貨幣の増減に比例して騰落するということは、争いを許さない事実である⁽⁶⁾と考⁽⁶⁾える」⁽⁶⁾とのべている。

これはすなわち、物価水準は通貨量によって決定されるという、素朴な貨幣数量説の表現にほかならない⁽⁷⁾。つぎの一節も、かれのこの立場を明らかにするものである。

「ある一国において金銀が発見されたとすれば、その国の通貨価値は、流通内に持ち出される貴金属の量が増加する結果として、下落し、諸外国のそれと同じ価値を持ちえないこととなるであろう。…：鉱山の発見される代りに、イングランド銀行のような流通手段として銀行券を発行する機能を有する銀行が創設されて、多額の銀行券が商人への貸出、または政府への貸付の方法によって発行され、そのために通貨量が著しく増加されたとすれば、それは鉱山発見の場合と同じ結果を生ずるのである。流通手段の価値は下落し、それに比例して財貨の価格は騰貴するであろう。この国と諸外国との間の均衡は、鑄貨の一部を輸出することによってのみ回復せられるであろう」⁽⁸⁾。

またリカードオによれば、一国の通貨価値の減少は、他国の金属本位通貨に対する為替相場の下落に表現される。すなわ

ちつぎのようにいう。「流通手段が貶値しない鑄貨、またはこのような鑄貨とすぐに兌換されうる紙幣から成立しているかぎり、為替は平価を中心として、貴金属の輸送にともなう諸費用より以上に、また以下にも変動するはずはない。しかし流通手段が減価紙幣から成立している場合には、為替はその減価のていどに応じて、必然的に下落するであろう」⁽⁹⁾。要するにリカードオの推論を要約すると、つぎのごとくである。

当時のイギリスのように、ある一国が不換紙幣を発行しているときには、それらが国内で過剰になったとしても、他国に輸出されない。このような事情の下において、地金を外国に輸送する費用以上に、造幣価格よりも外国との為替相場が下落し、あるいは地金の価格が騰貴するときは、いつでもそれは決定的に、紙幣が過剰に発行されたことを示すというのである⁽¹⁰⁾。

リカードオのこの推論は、兌換停止下のイギリスの実際の物価、為替相場、地金の価格の状態を、兌換停止以前のそれと比較することによって、うちたてられたものであった。そして兌換停止によって弊害が生じたのであるから、早急に兌換を再開すべきであると主張したのであるが、その場合に、銀行券を金地金と交換するよう提案した。これは「地金の高価」の第四版（一八一一年）の附録において、のべられたのであったが、その後兌換再開の要求が、一層高まったとき、「経済的にして安定な通貨のための提案」(Proposals for an Economical and Secure Currency) (一八一六年)の中で、さらに詳細に説かれた。

以上、リカードオの貨幣理論、および通貨政策の要旨を、のべたのであるが、かれの理論は、地金報告にもとり入れられ、地金主義貨幣理論の代表的なものとして、みなされるようになった。そのためにリカードオの見解は、当時の社会に多くの波紋を投じ、これに対して種々の面から批判が加えられ、論争がくり返えされたのである。

- (1) 地金論争の中心問題は、また地金報告の問題点でもあった。地金報告が問題とした主要点を要約すれば、つぎのとおりである。
- (1) 紙幣が減価したのか、あるいはそれともその反対に、金の価格が騰貴したのであったか。
 - (2) 発行高の増加は、為替相場に対して、なんらかの影響があったか。
 - (3) 発行高の制限は、金の価格および為替相場に、いかなる影響をおよぼしたであろうか。
 - (4) 発行の統制にかんしては、いかなる政策に、従わなければならぬか。(Cf. Andreades, op. cit., p. 221. 田田訳二九五頁参照。)
 - (2) ヴァイナーによれば、紙幣が過剰であったかどうかという問題に関連して、重要なことは、「一國が持つべき適当な通貨量は、どれだけか」ということである。そしてアダム・スミスは、それは「有効な需要」によって決定されると、ばくせんと答えたのみであるが (Wealth of Nations, Cannan's ed., Vol. I, p. 402, Cf. Hollander, The Development of the Theory of Money from Adam Smith to David Ricardo, in Q. J. E. XXV, 1911, pp. 36—7) 地金論争に至って、この問題として行なわれたいくまきれることになつたと述べらる。(Viner, op. cit., p. 125)。しかし地金論争の参加者たちは、はたしてこれほどたしかな意識をもつて、この問題にのぞいたのであろうか。
- 地金論者、とくにリカードオにとって、紙幣と金属貨幣とが同価値で通用しているならば、通貨量は適正に保たれてゐるのである。
- (e) Cf. R. S. Sayers, Ricardo's Views on Monetary Question, in Papers in English Monetary History, ed. by T. S. Ashton and R. S. Sayers, Oxford, 1953, p. 77.
 - (4) Ricardo, High Price of Bullion, Works, Vol. III, p. 66.
 - (5) Ibid., p. 53.
 - (9) Ricardo, Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee, Works, Vol. III, p. 193 note.
 - (7) リカードオは、イギリスにおけるある財貨の価格の、金属本位通貨を持つ外国における同じ財貨の価格に比較した相対的騰貴は、イギリス通貨の過剰の度合に比例することを認めた。ここに後にカッセルによって主張された、購買力平價説の萌芽が見られる。しかしリカードオは、過剰発行の存在することが、実際にこのような価格の比較によって、検出されることを示さなかつた。(Viner, op. cit., p. 126)
 - (8) Ricardo, High Price of Bullion, Works, Vol. III, pp. 54—5.
 - (9) Ibid., p. 72.

(9) Cf. Smart, op. cit., p. 236.

(三)

リカードオは、地金報告の作成に直接干与しなかつたけれども、その理論的骨組を提供したという点において、重要な役割を演じたということが、はっきりと、あるいは暗黙のうちにいわれている。地金報告に関するリカードオの影響を重要視し、かれの理論をすぐれたものとして、高く評価する学者をあげれば、枚挙にいとまがないであろう。たとえばマカロックは、「地金委員会の報告書にしんとうする原理は、リカードオ氏によって、このパンフレット「地金の高価」筆者挿入」に確立されたものと、実際に同じである⁽¹⁾と、いい、ヘルドも、「貨幣制度に関するリカードオの著書は、理論的観点から、かれの最上の労作であり、実際にも、まったく特殊の作用をおよぼした。地金報告書が、一八〇九年のリカードオの著書にもとづいたのみでなく、後の銀行立法も、これに結びついている⁽²⁾」とのべている。

リカードオの貨幣理論における業績を賞讃する人は、それをかれの株式仲買人としての経歴に帰せしめる。すなわち、「かれの金融業が、貨幣問題における特別な興味——かれの最初の出版物の問題に導いた⁽³⁾」のであり、「異常な動揺の時代につんだ金融市場における実際の経験は、経済上の著述を、考え深く研究することによっておぎなわれて、同時代の貨幣上の諸事件に深く通達していることから、貨幣上の諸原則を、知的に把握することに発展せしめたのである⁽⁴⁾」。

しかしリカードオに対しては、かならずしもこのようにあたたかい讃辞のみが、与えられたわけではなかつた。フェッターは、以上のような見解をアナクロニズムであると批難した⁽⁵⁾。かれによれば、リカードオの出版物があらわれる以前に、すでにソーントン、ハスキンスンなど地金委員会のメンバーたちは、貨幣問題に関する老練家であつたのであり、リカードオの理論がこれらに影響を与えたと信ずることは、合理的でないという。

デイルもまた、リカードオの貨幣理論を賞讃する人びとは、かれが、「株式仲買人としての経験にめぐまれているという想定をたてているが、事實は、けっしてそうでないことを示している。」⁽⁶⁾といひ、貨幣理論において、リカードオほど多くのあやまちをおかしたものはないと評している。

リカードオによる一八〇九年執筆の論文が、地金委員会の任命という重要な施策の推進に影響を与え、かれの示唆にもとづいて地金報告が作成されたという説明は、うたがうことなく、大部分の人びとにそのまま信ぜられてきたけれども、これに対して、リカードオの見解と地金報告においてのべられた見解の間には、重要な相違があると、地金報告は、なんらリカードオに負うべき理由はないとする見方がある。⁽⁷⁾そしてこのことを主張する人は、一般に一八一九年に至ってリカードオの制限条例廃止の提案が、実際に政府の政策の上に実現せしめられた後において、かれの貢献が認められるようになったと考へるのである。⁽⁸⁾

(1) J. R. McCulloch, 'Life and Writings of Mr. Ricardo', in *The Works of David Ricardo*, London, 1846, pp. 18—9.

マカロッチは、続けて言う。

「ただこの報告書では、これらの原理がもっと総合的に、かつ通俗的なやり方で論証されており、またこれらの原理が、わが国でもっとも有能な人びとの一部によって構成される委員会の手で勧告されたという事情があったために、さもなければえられなかった重みと權威とを、これらの原理は与えられたのである。」と。

(2) Adolf Held, *Zwei Bücher zur sozialen Geschichte Englands*, Leipzig, 1881, S. 196.

類似の見解は、ほかにも幾人びとによつても述べられた。

すなわちウォーカー (Francis A Walker, *Political Economy*, 3rd ed., N. Y., 1888, §. 197, p. 146)、『スミス (Alfred Marshall, *Money, Credit and Commerce*, London, 1922, pp. 41—2)』、『スマート (Smart, op. cit., p. 60)』、『シルヴァーリング (Silverling op. cit., p. 420, p. 430, foot-note)』、『ハンジマン (Angell, op. cit., p. 60)』など。

なおジョーンソンは「リカードオは、地金委員会のメンバーでもあった」と書いて居るが (Cf. Joseph French Johnson, *Money and*

Currency in Relation to Industry, Prices and the Rate of Interest, Boston, 1906, p. 292.) シルヴァーリングによつて、

かれがそのことばが指し示した。(Cf. Silverling, op. cit., p. 430 foot-note.)

(3) Sayers, op. cit., p. 76.

(4) Hollander, David Ricardo, *A Centenary Estimate*, p. 58. 山下訳七三頁。

(5) Fetter, op. cit., pp. 67—8.

(6) Karl Diel, *Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung*, 2 Bde., Leipzig, 3 Aufl., 1922, S. 217.

(7) リカードオ自身は「ボウメンキット氏への答弁」において、「これらの原則〔地金報告の、筆者挿入〕は、あらゆる根本的な点において、私がすでに発表したところのものと同一である」(Works, Vol. III, pp. 161—2)と述べている。しかしフェッターは、地金委員会の任命を提案したホーナーとリカードオとの関係について、「つぎのように書いて居る。

「われわれは、かれ〔ホーナー、筆者挿入〕の動機がなんであったか、あるいはいかになるていどまで、かれの活動が議会内において、または議会外において他人との相談を基礎にしてなされたか、われわれには分らない。しかし貨幣問題についてのかれの広はんな研究と、公共の問題についてのかれの関心を考慮して、われわれは、かれの行動をなんらかの外部の圧力によるものとして、説明する必要はない。リカードオがそれに対して、かれを刺激したという考へは、たんなる推測である。」(Fetter, op. cit., p. 70)

他方ホランダーは、「たとえ影響があったとしても、いかなるていどにホーナーの思想および行動が、直接リカードオの影響を受けたかは、興味ある思想上の根拠を供する。多分二人は友人であつて、また個人的にも社会的にも、親しい交際があつた。ホーナーの通貨問題に関する興味は、リカードオのそれに先立っていたし、またそれに刺激と影響とを与えたらしく思われる。しかしホーナーの興味は、積極的であつて持続してゆくものというよりも、むしろ批判的であつたときだけのものではなかつた。一八〇八年から一〇年にかけての通貨の膨脹はかれが政治生活に没頭していたとはいへ、かれの一般的な注意以上に注意をひいたという証拠は「まったくなく」(Hollander, David Ricardo, *A Centenary Estimate*, pp. 45—6. 山下訳五四頁)とのべ、フェッターとちがった立場を示している。

(8) フェッターは「地金報告がすべての点から見ても、リカードオの仕事であつたということをのべた最初の出版物は、一八二三年の物故者年鑑 (Annual Obituary) とある」(Fetter, op. cit., p. 69.)

(四)

リカードオの見解と地金委員会の考え方の相違としてあげられるのは、第一に地金委員会は政府の政策、とくに戦争政策に対して鋭い攻撃を加えたのであったが、イングランド銀行に対しては、むしろ柔軟な態度でのぞんだのであり、これに反してリカードオは、イングランド銀行に対しても政府に対すると同様に、敵意を示したということである。このことはリカードオが、一八一〇年モーニング・クロニクル紙に寄稿した地金報告に関する三通の書簡のうち、九月六日附の「地金委員会の報告」(Report of the Bullion Committee)と題する小論文の中で、地金委員会が「非常な慈悲をもってイングランド銀行の理事たちをあつかつた」⁽¹⁾とのべているところからも、うかがわれるところである。

地金委員会のメンバーであったパアネル(Henry Parnell)は、地金報告に関する議会の討論において、リカードオと同じくイングランド銀行に対する敵意を表明した。しかしハスキッソン(William Huskisson)とホーナーは、パアネルの意見に同意しなかったといわれている。⁽²⁾

つぎにリカードオは、地金報告の出現以前に、紙幣過剰をもって紙幣価値下落の唯一の原因とし、あくまでもこの主張をまげなかったのであったが、地金報告は紙幣量の増加以外に、貿易の変化——たとえば輸入の増加——や、戦争による政府からの補助金の増加など、政治的事件にもとづく為替変動を認めたということである。

フェッターによれば、⁽³⁾マルサスが「われわれはすでにその根底において、なんら通貨の過剰または欠乏と関連するところのない、貿易差額または支払差額の存在を否定することがあやまりであること(もつともこの非難はリカードオ氏のみにかぎられていて、地金報告はこれからまぬかれてい)についてのべた。」⁽⁴⁾といい、地金報告が、「為替が最近こうむつた少くとも大なる下落の一部分は、貿易の状態からでなく、わが国の通貨の相対価値における変化から、おこらなければならないという推論に

反対することは、困難であることを発見する」と記しているところから、それは明らかであるという。

リストもフェッターと同じ立場をとるが、⁽⁵⁾地金報告から、つぎの一節を引用している。

「しかし委員会は、全体としていうなら為替の暴落のていどは、そのときどきにおける紙幣量の増加の結果であるとするには、反対である。委員会は為替のもつと小規模なかつ通常の変動は、一般にわが国の貿易状態にもとづくものであり、また政治的事件も貿易状態に作用することにより、同じく為替の騰落にしばしば作用するものと考える。」⁽⁷⁾

類似の意見は、マルサスによつてもとなえられた。一八一一年エディンバラ・レビューにおける紙幣減価に関するかれの評論は、リカードオとの間に論争を生ぜしめた。

マルサスはリカードオの「地金の高価」は、紙幣の異常な減価に関する議論に発端を与え、さらにこの中で、通貨の一般原理について二つのもつとも重要な理論が確立されたという点においては、賞讃に値するという。

すなわちそれは第一に、「あらゆる種類の流通手段は、他のすべての商品と同様に信用あるいは本来の用途に関係なく、需要とくらべて過剰によって必然的に減価され、欠乏によって価値において騰貴される」⁽⁸⁾という「政治経済学の全上部構造がたてられる基礎である、需要供給の一般原理から直接生ずる」⁽⁹⁾理論であり、第二に、「通貨の過剰および欠乏は、相対的なことばにすぎない。一国の通貨は、他国との関係以外にけつして過剰となりえない」⁽¹⁰⁾とする主張である。

マルサスは、これらの理論がリカードオによつて非常に明確に論ぜられ、かれが紙幣減価の真の原因を証明したことを認めるけれども、しかし「リカードオ氏の議論中の大なる誤謬は、かれが為替相場に影響をおよぼす諸原因を部分的に観察したということである」⁽¹¹⁾とのべ、リカードオに対してきびしい批判をあびせた。

かれは通貨の過剰あるいは欠乏が、有利なあるいは不利な貿易差額、すなわち地金の輸出入をひきおこす原因であるとするリカードオの見解に加えて、ある国において種々の欲望と必要、——たとえば外国商品の需要増加——から輸入が輸出を

超過した場合にも、為替相場が変動することを指摘した。これは、リカードオのぜんぜんかえりみなかったことであり、これの貢献が過小評価される理由のひとつが、ここにあったといえよう。

マルサスによれば、為替相場に影響をおよぼすこれら二つの異った原因は、ときには同時に、ときには独立に作用するのであって、両者はそれぞれ別個にとりあげ、考察しなければならぬが、かれはリカードオの説明は、これらのうち、ひとつだけにかぎっているために、このことがリカードオの理論の不備を示すものであると考えた。

したがってマルサスはいう。「リカードオ氏は、有利なまたは不利な為替をもつばら通貨の過剰または欠乏に帰して、一時的な輸入超過または輸出超過をひきおこす根本原因として、異った社会の欲求または欲望を看過している⁽¹²⁾」と。

すでにソーントン⁽¹³⁾は、不利な貿易差額は、凶作による穀物輸入から発生し、そして輸出国が財貨の受取を欲しないために、地金に対する需要をまし、地金の価格が騰貴することを明らかにしたのであったが、リカードオは「地金の高価」の中で、このような考え方があやまりであり、不利な貿易差額は、通貨の過剰のいかなる原因からも生じないことを強調した。ソーントンに対する反論としてのべられたつぎの一節から、かれの立場がうかがわれる。

「われわれが、財に対する交換に鑄貨を与えるのに応ずるなら、それは必要からでなく、選択からでなければならぬ。われわれが過剰な通貨をもち、したがって輸出の一部たらしめることが適当だといふのでなければ、輸出するより以上の財を輸入しないであろう。鑄貨の輸出は、それが低廉なるためであり、不利な貿易差額の結果でなく原因である。われわれが、鑄貨をより有利な市場に輸送しうるのでないなら、あるいは鑄貨よりもより有利に輸出しうる財を有するのでないなら、それを輸出しないであろう。それは過剰な通貨に対する有益な救済策である⁽¹⁴⁾」。

かくしてリカードオのこのような反論にもかかわらず、マルサスもソーントンに同意したのであり、したがってかれは、ソーントンの説を引用して、通貨の輸出はリカードオが説得を試みたように、不利な貿易差額の原因でなく、むしろ結果で

あるとし、「それは有益な救済策でなく、明らかにソーントン氏によつてのべられた原因によるものである。すなわち債権国は、極たんに安い値で誘惑されることなしに、欲しない財の附加量を受けとることをよるこばないし、またなんらこのよ⁽¹⁵⁾うな誘惑がなくても、商業界の通貨である地金ならよろこんで受けとるといふためである」とのべた。

以上のようなマルサスの批評に対してリカードオは、一八一一年はじめに出された「地金の高価」第四版の附録の中で、マルサスの論文に関する所見をのべたのであったが、かれは、マルサスによつて加えられた批評を考察することは、「現存の弊害に対する救済策を促進するであろうし、かつ将来それをふたたびくり返す危険を防止する傾向がある⁽¹⁶⁾」と確言し、その前半において反論を展開した。しかしリカードオはここにおいても、「地金の高価」の初版におけるかれのはじめの主張を交えることなく、ソーントンにもマルサスにも反対し、「不利な貿易差額、したがって低い為替相場は、いかなる場合においても通貨の相対的過剰、ならびに低廉なことにとつづけられ⁽¹⁷⁾る」という結論をもつて、かれの決定的な意見としたのであった。

(1) Works, Vol. III, p. 131.

(2) Hansard, Second Series, Vol. XIX, 8 May 1811, pp. 1046—7, Cited in Fetter, op. cit., p. 67 footnote.

フエッターは「保守党政府 (Tory Government) の戦争政策に批判的であった人は、一般に地金報告の支持者たちであった」といふことである。(Ibid., p. 70.)

(3) Ibid., p. 67.

(4) Edinburgh Review, February 1811, p. 361.

(5) Canning, op. cit., p. 32.

(6) Charles Rist, History of Monetary and Credit Theory from John Law to the present day, translated by Jane Degras, London, 1940, pp. 156—7. 天沼紳一郎訳「貨幣信用学説史」一九二一—三頁。

ホーナーは、一八一〇年二月一日地金委員会任命提案の演説において、「金の高価は、一部分は必要以上のイングランド銀行券の流通

によつて、そして一部分はその国の外国貿易がおかれた新しい事情によつて、——たとえばバルティックからの海軍の軍需品および穀類の莫大な輸入、それは正貨で支払われなければならない——生じたかもしれない」とのべた。(Smart, op. cit., p. 237)

(7) Canan, op. cit., pp. 35.

リストは、リカードオと地金報告との相違点をほか二つほどあげている。すなわち、イギリスにおける価値の本位に関する問題と、紙幣に対する信頼の欠如の問題である。(Rist op. cit., pp. 153—6. 天沼訳一八八—九一頁。)

リストにすれば、地金報告は、本位がつねに金であるか、または紙幣であるかという問題は論議すべきであるが、しかし、「いずれにせよ、わが国の流通手段が、事情の許すかぎりすみやかに、その本来のまた法律上の本位、すなわち金地金にふたたび一致することは、国民にとつてもっとも望ましいことである」(Canan, op. cit., p. 16)とのべ、この点についてあいまいな態度をとっているのに反し、リカードオは、明確に価値の本位は紙幣であると主張しているという。

たしかにリカードオは、「経済的にして安定な通貨のための提案」において、経済的にしてかつ安定な通貨として、紙幣を提案しているけれども、その兌換は、鑄貨よりも地金をもつてすることから、紙幣の価値は地金の価値にもとづいていことがうかがわれる。

つぎに地金報告は、為替相場の変動をもたらす原因として、紙幣の過剰以外に強制された紙幣に対する不信をあげているのであるが、(Cf. Canan, op. cit., p. 22.) リカードオにおいては、このことはまったくとりあげられなかったというのである。

当時フランスのフックス紙幣の経験から、たんに数量の過剰のみならず、信頼の欠如も紙幣の価値に影響をおよぼすことが知られていたのであったが、リカードオはこれを故意にしりぞけ、数量の視角からのみ問題を解決しようとしたのであった。(Cf. Ricardo, Reply to Mr. Bosanquet's Observations, Appendix, Works, Vol. III, p. 248.)

(8) Edinburgh Review, February 1811, p. 341.

(9) Ibid., p. 341.

(10) Ibid., p. 341.

(11) Ibid., p. 342.

一八一一年二月、ヘドモン・マ・レヴェューの著稿「マルサスの論文は、リカードオ、フィン・ハムル (Robert Muesel, An Inquiry into the Effects produced on the National Currency and Rates of Exchange by the Bank Restriction Bill, London, 1810.)」ブロン (William Blake, Observations on the Principles which regulate the Course of Exchange, and on the

present depreciated state of the currency, London, 1810.)」ハムキッサン (William Huskisson, The Question concerning the Depreciation of our Currency stated and examined, London, 1811.)」ボサンケットによる地金に関する「インマニヤ」

(21) Ibid., p. 342.

(22) Thornton, op. cit., pp. 131—2. 渡辺佐平、杉本俊朗訳「ソートン・紙券信用論」一四五一—六頁。
リストは、地金報告の考え方が、リカードオよりもむしろソートンの理論に近いと考へた。(Rist, op. cit., p. 153, p. 156. 天沼訳一八八頁、一九二頁。)

(23) Works, Vol. III, p. 61.

(24) Edinburgh Review, February 1811, p. 345.

マルサスは「一八一一年八月ふたたびエディンバラ・レビュー」に「地金の高価に関する論争についての評論」をのせたが、この中で「われわれは、過去の不利な為替はつねにもっぱら、イングランド銀行券の発行増加に由来したということをのべようとするのではなからう」(Edinburgh Review, August 1811, p. 456.)

(25) Works, Vol. III, p. 100.

(26) Ibid., p. 116.

マルサスは「一八一一年四月七日、ホーナーにつぎのように書いている。

「私は、いまエディンバラ・レビューに関するリカードオ氏の所見を讀んでいる。しかし、まったく納得出来ないままである。——事実私は、為替の変化を通貨の過剰または欠乏に帰することのあやまりであることよりも、確信するいかなる点もない。」(Stafia, Note on the Bullion Essays, Works, Vol. III, p. 12.)

スラップフは、リカードオとマルサスとの交友関係について、つぎのようにのべている。

「いままで、リカードオとマルサスは会ったことがなく、かれらの間の論争は、印刷物の上においてのみ続けられた。一八一一年六月にマルサスは、リカードオに自己紹介した。一八一一年八月、エディンバラ・レビューにおける地金に関するマルサスの第二の論説は、リカードオについてのいかなる批評もふくまなかった。そしてかれらの間のそれ以上の論争は、個人的な議論と書簡に限定された。」(Ibid., p. 12.)

なおマルサスは、一八一一年八月のエディンバラ・レビューで、「紙幣発行の減少は、成就さるべき重要な点である。いかなる地方か

らそれがおころうとも、あるいはいかなる動機からそれが喚起されようとも、われわれは、現在の通貨の混乱した状態に対する唯一の特効薬として、歓喜をもってそれを歓迎するであろう」とのべ、リカードの兌換再開案にはさんせいしている。(Edinburgh Review, August 1811, p. 469.)

(五)

貨幣の購買力、したがって物価がその数量に支配されるということは、リカードがつねに強調した中心思想であった。周知のごとく古典学派の貨幣理論は、一般に金属主義——貨幣の価値は、その素材たる地金の価値に支配されるとする——の上に立つものとされている。これは、アダム・スミスによって明確な説明がなされたのであったが、さらにリカードは、貨幣の価値が、貨幣と財貨との交換関係によって決定されることを明らかにした⁽¹⁾。この貨幣数量説の立場は、スミスにおいてはかえりみられなかったことであり、このことはまた貨幣学説の上からは、金属主義から名目主義への転向の芽ばえを示すものにはかならない。

リカードの貨幣数量説は、兌換停止下のイギリスにおける減価した不換紙幣について考察し、すみやかにその数量を収縮して正貨支払を復活するよう、イングランド銀行に要求することを目的として確立されたものであると見られている⁽²⁾。リカードの意図したところは、かれの時代の社会状況を考慮して、実際の政策をうちたてることにあったために、その貨幣理論は、一面的であり排他的であるとのそしりをまぬかれぬ。マルサスによって、部分的見解であるとして批難されたゆえんである。たしかにリカードは、紙幣量の過剰⁽³⁾ということを強調したあまり、これ以外に為替相場に変動をおよぼすいくつかの原因を無視したことは、遺憾であった。

当時のイギリスにおける物価および地金の騰貴、為替相場下落の原因が、はたしてリカードの主張するように、イングランド銀行券の過剰発行のみに帰せられるのであるかという問題は、現在もなお議論の余地がのこされている。この点については、当時の統計資料とさらに豊富な文献によって、改めて検討する必要がある。

フェッターの研究⁽³⁾においては、地金報告に対するリカードの貢献を支持する伝統はくつがえされたけれども、このこと⁽⁴⁾によってリカードの学問上の寄与が、消去されたわけではない。たとえリカードの見解と地金報告のそれとの間に、ある相違が指摘されたにしても、それはきわめてわずかの部分であり、根本的には両者は、同じ内容を有していると考えてよいであろう。

地金報告は、貨幣状態以外に、為替に変動をおよぼすものがあることを認めただけでも、しかし結局、「すべての価格の一般的騰貴、金の市場価格における騰貴、そして為替の下落は、他国に輸出しえない通貨を採用した国、あるいは輸出する通貨に自由に兌換しえない国における、流通手段の数量過剰の結果であるだろう⁽⁴⁾」とのべ、「紙幣量の過剰は、正貨の支払停止によって、イングランド銀行の紙幣発行に対するあらゆる統制の撤廃されたことに帰せられる」のであるから、正貨支払を再開すること以外に、適当な救済策を見出しえないと宣言した。かくして地金報告の結論は、リカードの見解とまったく同一であった。

この兌換再開の提案は、一八一一年五月六日ホーナーの決議案として議会に提出され、いくたびか討論がくり返されたが、否決され実現にいたらなかった。しかし一八一九年二月に兌換開始委員会(Select Committee on Resumption)が任命され、五月にはピール提案の兌換再開法(Bank Resumption Act)が成立した。この法案は、二〇年二月一日から十月一日までは、標準金一オンスにつき四ポンド一シリング、十月一日から二一年五月一日までは、三ポンド十九シリング六ペンス、同年五月一日から二三年五月一日までは、造幣価格三ポンド十七シリング一〇ペンス半の割合で、六〇オンス以上にかぎって金地金で兌換することを勧告したのであったが、ここにおいて、かつてリカードの提案した金地金兌換の方法

が、採用されることになったのである。ただこの計画は、充分な試験期すら与えられず廃止され、一八二三年五月一日からイギリスは、正貨兌換に復帰した。その後第一次世界大戦を経てこの方法は、一九二五年に至って金本位法 (Gold Standard Act of 1925) とし、ふたたび採用されることとなったが、すなわち今日、金地金本位制度 (Gold bullion standard) と呼ばれるものがそれである。

ともあれリカードオの「金の価格」を論じた書簡が、地金報告出版後、一八二〇年八月二七日のモーニング・クロニクル紙の社説において、「紙幣減価の真の原因に対して公衆の注意をひくのに、もっとも本質的に寄与した」と推奨され、また「地金の高価」が一八二〇年の初版以来一八一一年までに、増補第四版を出すに至ったことから、当時リカードオの世人に与えた影響がいかに大きかったかが、想像されよう。

アダム・スミスからリカードオに至るまでの貨幣理論の発展は、多くの重要な原則の出現をもたらした。しかしリカードオは、たんにかれ以前の学説を継承し、それを確証したのみでなく、それを実際に政策の上に応用せしめたのであった。

兌換再開以後イギリスにおいては、銀行券発行制度に関して、ふたたび論争が戦わされることとなった。すなわち通貨主義と銀行主義の対立であるが、前者は貨幣数量説に立脚し、リカードオの理論をつぐものであった。そして一八四四年のピール銀行法 (Peel's Act) によって通貨主義の勝利に終り、貨幣論争に一段の終止符を打つことになったのである。リカードオの貨幣金融論の上に残した遺産は、内容上の論議はとにかくとして、きわめて大であったといわなくてはならない。

(1) リカードオは、貨幣の価値ないし購買力を貨幣数量説によって説いたのであるが、他方かれはスミスにしたがって、貨幣と財貨とを同一視し、貨幣の価値決定に労働価値説を適用した。これが貨幣数量説に対するリカードオの立場について、矛盾する点として指摘され、非難されているところであるが、この問題については、別に詳細に検討されなければならない。ただここでは、リカードオが労働価値説によって貨幣の自然価値を、数量説によってその市場価値を説明したのであると解するにとどめておこう。

(2) リストは、「リカードオの関心は、いかなる場合にも適合する一般的な紙幣理論をたてることにむけられたのではなく、もっぱらイギリス史上の特定期間において、一定の貨幣政策を勝利あらしめることにかかっていたのである」と書いている。(Rist, op. cit., p. 141. 天沼訳一六九頁)。

(3) Fetter, op. cit.

(4) Smart, op. cit., p. 244. Cannan, op. cit., p. 17.

(5) Smart, op. cit., p. 253. Andreadés, op. cit., p. 227. 岡田訳三〇三頁。

(6) Andreadés op. cit., pp. 238—9. 岡田訳三一六頁。

(7) Staffa, Note on the Bullion Essays, Works Vol. III, p. 4 foot-note.